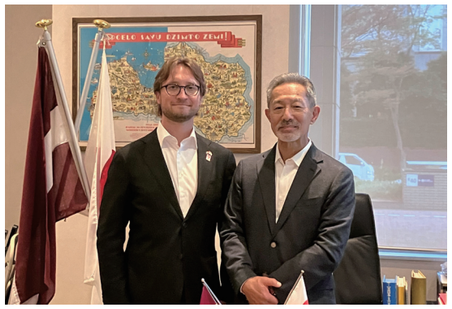


左:ズィルガルヴィス大使 右:石橋理事長

関西日本ラトビア協会の概要

所在地	大阪市北区梅田3-3-5　大和ハウス大阪ビル内
設　立	2008年（平成20年）9月24日
会員数	個人会員 85名　　法人会員 72社（2026年6月末現在）
事業内容	①ラトビア共和国の文化、スポーツ、経済等で日本との交流に関する情報を集め、 会報・インターネット等を通じて発信する。 ②ラトビア共和国から来日する人達と交流し、活動を支援する。そしてラトビアからの留学生、 または日本からラトビアへの留学生に対する奨学金等の支援を行う。 ③日本からラトビア共和国に観光その他の目的で訪問しようとする人達の企画を支援する。

役員

（2026年6月30日現在／敬称略）

名誉顧問	ズィグマールス・ズィルガルヴィス　駐日ラトビア共和国特命全権大使
顧　問	多賀 敏行　元駐ラトビア日本国大使 東郷 武　前関西日本ラトビア協会会長・前在大阪ラトビア共和国名誉領事
理事長	石橋 民生　在大阪ラトビア共和国名誉領事・大和ハウス工業（株）特別顧問
常務理事	上野 慶三　Riga Wood Japan 代表 池田 裕子　元関西学院大学学院史編纂室 専任主管 溝口 明子　SUBARU 代表
理　事	寺岡 志郎　大阪日本ポルトガル協会 谷本 瑞絵　ラトビア・ヘイズ 代表 竹村 肇　（公財）日本棋院 参与 太田 敏正　（株）プロアクティブ経営 社長 石橋 さゆみ（株）ユニフロー 社長、名誉領事夫人 大仁 公一　（株）伸和エージェンシー 社長 浅野 敏行　（株）アサノ 社長 平越 國和　（株）丸国林業 会長 上平 豊久　（株）大伸社 アドバイザー 清水 良二　清水木材（株） 社長 山本 拓　日本ノボパン工業（株） 社長 加藤 拓　（株）マーキュリアインベストメント ストラクチャード・エクイティ投資戦略最高責任者 鶴田 宜江　Cafe Laima 代表 堀口 大樹　京都大学 准教授 鈴木 広隆　神戸大学 教授 今西 貴夫　元在ラトビア日本大使館 一等書記官／（株）潮エスト 代表取締役／ 関西学院高等部・滋賀県立大学非常勤講師 金井 雅孝　大和ハウス工業（株） 執行役員 秘書担当 甲斐 丈晴　大和ハウス工業（株） 総務部秘書室長 ※事務局長兼務
監　事	木村 宗光　大和ハウス工業（株） 元取締役 ※理事兼務 近久 啓太　大和ハウス工業（株） 東京本社総務人事部長 ※理事兼務

発行：2026年9月
編集：関西日本ラトビア協会事務局
大阪市北区梅田3−3−5　大和ハウス大阪ビル

JLSK NEWS

2025年度 関西日本ラトビア協会ニュース Vol.15



INDEX

01 ラトビアとは
03 特集：2025年 大阪・関西万博を振り返って
09 寄稿文のご紹介
11 活動報告
25 会員一覧

手つかずの自然と中世の面影が色濃く残る国

Latvia
ラトビア



バルト海に面した自然豊かな国

ラトビア共和国は、「バルト三国」の中央に位置する北ヨーロッパの小さな国。北海道の約77%の面積に、およそ186万人の人々が暮らしています。ラトビアの風景の中で、まず印象に残るのは緑の多さ。国土の半分を森が占め、河川や湖が点在する自然豊かな土地に、稀少な動植物も生息しています。最高峰でも標高312mしかないため、少し高いところへ登ると、美しい大地がどこまでも広がっている光景に出会えます。

日本と同様に四季があり、新芽が芽吹く緑眩しい春、花の咲き誇る色鮮やかな夏、黄金色に輝く紅葉の秋、モノクロのコントラストが広がる白銀の冬と、変化に富んだ美しい季節がめぐります。



※地図は概略図であり、国名等も省略しています。

まるで中世に迷い込んだかのような街並み Rīga リーガ

ラトビアの首都リーガ市は、ダウガワ川沿いに教会の尖塔が立ち並ぶ美しいパノラマ風景が広がる情緒ある街です。旧市街全体が世界遺産に登録されており、ハンザ同盟時代から残る建築群や石畳が中世の雰囲気を今に伝えています。馬車の轍（わだち）の跡が残る細い路地や、時間をかけて丸くなった敷石からは歴史の積み重ねを感じることができます。

さらに、ラトビア人にとって花は生活の一部であり、頻繁に花束を贈る習慣があります。旧市街は中世の面影を残すだけでなく、花や世界トップレベルのオペラやオーケストラなどの音楽が融合し、ラトビアの奥深い伝統文化が滲み出る独特の雰囲気を作り出しています。

リーガはまた、1510年に市庁舎広場に立てられたモミの木に世界で初めて装飾が施されたことから、クリスマスツリー発祥の地とされています。11月下旬から1月上旬まで、大聖堂広場を中心にクリスマスマーケットが設営され、ホットワインを片手に買い物を楽しむ人々で賑わいます。

Latvia ラトビア

- 面積／6.5万平方キロメートル（日本のおよそ6分の1）
- 人口／186万人（2025年1月時点 ラトビア中央統計局）



History

1282年		リーガがハンザ同盟に加盟
1583年		リヴォニア戦争の結果、リトアニア・ポーランド領となる
1629年		スウェーデン・ポーランド戦争の結果、一部分がスウェーデン領となる
1721年		北方戦争の結果、大部分がロシア領、残りはポーランド領となる
1795年		第3次ポーランド分割により全土がロシア領となる
1873年		第一回「歌の祭典」開催
1918年	11月18日	独立を宣言
1920年	8月11日	ロシア社会主義連邦ソビエト共和国との間に平和条約締結
1921年	1月26日	日本を含む、5か国により、法律上の国家承認
1940年	8月 5日	ソ連に編入
1974年	6月18日	兵庫県神戸市とリーガ市　姉妹都市提携
1990年	5月 4日	独立回復宣言
1991年	9月 6日	ソ連の国家評議会においてバルト三国の独立を承認
2004年	3月29日	NATO加盟
	5月 1日	EU加盟
2006年	4月	駐日ラトビア共和国大使館開設
2008年	5月	在大阪ラトビア共和国名誉領事館開設
	7月17日	北海道東川町とルーイエナ町（現ヴァルミエラ郡）姉妹都市提携
2014年	1月 1日	ユーロ導入
2015年	上半期	EU議長国
2016年	7月 1日	OECD加盟
2024年	12月	在名古屋ラトビア共和国名誉領事館開設
2026年	1月	国連安全保障理事会の非常任理事国

※出典：外務省ホームページ https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/latvia/index.html（2026年8月時点）

在ラトビア日本国大使館 https://www.lv.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html

光が闇に勝利したことを祝う日——春分祭


いたるところでネコヤナギの束が売られている


ラトビアの“イースターエッグ”


卵を転がす遊びに興じる子どもたち


ブランコで揺れる子どもたち


春分祭にあわせて、ラトビア野外民族博物館では市が立っていた


イースターのイベントを楽しむ子どもたち

緯度の高いラトビアでは夏と冬の日照時間が大きく異なり、古来より太陽の動きが生活に深く根ざしてきました。1年を立春・春分・夏至など8つの節目に分け、農作業の目安とするとともに、その節目ごとに祭祀を行ってきました。なかでもラトビア語でLielā Diena（リエラー・ディエナ）と呼ばれる春分は、昼が夜を上回る分岐点として「光が闇に勝利した日」と位置づけられており、人々が晴れやかな気持ちで祝う特別な日です。

春分の日に先立ち、その前の日曜日にあたる「ネコヤナギの日曜日」には、「病気は外へ、健康は内へ！」などといいながら、ネコヤナギの枝の束で家族のお尻を叩きます。ネコヤナギの花穂は、長い冬が終わって最初に太陽の光を受ける大きなエネルギーを持つ存在で、春や豊穣の象徴とされています。また、その花穂の丸さと枝のしなやかさが、健康であることを表していると考えられてきました。

春分祭に欠かせないのが卵とブランコです。卵はラトビアの伝承において春と太陽の象徴とされており、前日に玉ねぎの皮と木の葉などで独特の模様を染めつけます。そうして作った卵を二人でぶつけ合い、割れなかった方の願いが叶うという「Olu　kauja／ウアル・カウヤ（卵の戦い）」は、いまも親しまれているゲン担ぎです。またブランコは、丘の頂上から天の神々に向かって高く漕ぎ上げることで、作物の成長と生命の繁栄を願う意味を持っていました。

春分祭の時期が近づくと、各地でマーケットやワークショップが開かれ、街の店々もイースターらしい愛らしい装飾で彩られます。自然信仰に根ざした古来の祝祭と、キリスト教のイースターが自然に溶け合って受け継がれてきた——そんなラトビアならではの重層的な文化を、街歩きしながらゆっくりと感じてみてください。

表紙写真：©Courtesy of LIAA
photo&text by Akiko Mizoguchi

2025年　大阪・関西万博を振り返 って（バルトパビリオン）　溝口明子

バルトパビリオンについて



セービングゾーンにあった「バルトパビリオン」。
タイプBで敷地面積は約300㎡。



鍵括弧「」のようなロゴは、ラトビアのLと
リトアニアのLをが合わさったもの。



「共創」「自由」等の
キーワードが、ラトビア語、
リトアニア語、英語、日本語で
点滅しながら
スマートガラスに
浮かび上がる。

昨年、関西を熱狂の渦に包んだ大阪・関西万博。ラトビアは南隣のリトアニアと一緒に「バルトパビリオン」として参加しました。多くの来館者に愛されたパビリオンの様子を振り返ります。

緑と白を基調としたファサードから中に入ると目の前には「自然の薬局」が広がっていました。バルトの大地で自生する約300種もの植物標本が、解説文とともに展示されていました。いずれも飲食用としてだけではなく、太古の昔から実際の暮らしでその薬効が活用されてきました。

パビリオンの奥には展示の目玉「KIZUNAの壁」が。壁いっぱいに湾曲に広がる緑色のガラスの壁は結露していて、誰もがメッセージを描けるインスタレーション。メッセージは数分で消えていくようになっており、一瞬で過ぎ去る時の流れや、一見すると普遍的な壁ですら常に変化が起きる様子を表現し、個人の行動が地球に与える影響について来館者に考えるよう促す体験型アートでした。

館内中央の小部屋には「バラビちゃんが大好きなもの」が3面の壁に木工品の形ではめ込まれていました。また、この小部屋では夏至祭等のバルトを体感できるイベントも数多く開催され、多くの方々が楽しまれました。

また、嗅覚や聴覚からもバルトを感じてもらうべく、万博のためだけに調合されたフレグランスが使用され、館内にはバルトの森の香りが立ち込めていました。BGMには、リトアニアの作曲家M.K.チュルリョーニスの作品からインスピレーションを得て、バルトの自然をイメージして作られた音楽が流れていました。

パビリオンの随所にパネルやモニター、タッチパネルがあり、両国の概要をはじめとし、自然、手工芸、さらには最新のテクノロジーも紹介されていました。タッチパネルのなかでもユニークだったのが、バーチャルでの「植樹」！画面上でタップして「トウヒ」「白樺」「松」の木をラトビアやリトアニアの森に植えると、実際にその木が現地に植樹され、参加者にはメールでデジタル証明書が届きました。





壁3面、上から下まですらりと並ぶ植物は
両国の博物館や有識者によって採集された。



「KIZUNAの壁」の前で行われた開幕日の
テープカット。©Reinis Strautins



特別な技術を使って結露させている。



両国の伝統やテクノロジーを、木の温もりと
バラビちゃんの愛らしさを通して表現。



会期中約40のイベントが開催された。
これは両国式サウナ「ピルツ」と「ピルティス」を
紹介するイベントの様子。©Andri Magdych



館内のパネルやモニター。



館内のパネルやモニター。

パビリオンの公式マスコット「バラビちゃん」も人気を集めました。両国の人々はキノコ狩りが大好き!キノコは、バルト地域の森や自然の恵みを象徴するとともに、幸運のシンボルとされてきました。また、キノコの菌糸が土壌の下で森全体の生態系を繋ぐ役割を果たしているように、地球にいるすべての人が繋がっていることを想起させる意義も担いました。

パビリオンが掲げたコンセプトは「WE ARE ONE」。一人一人誰もが国際社会にとって必要不可欠な存在であり、みんなが一つになって次世代のために地球を守り、ともに未来を築いていこうと、会期を通し呼びかけ続けました。

**バラビちゃん人形は、バルトパビリオンから
在大阪ラトビア名誉領事館に寄贈されました。**

両国民に人気のキノコはポルチーニ茸。「バラビちゃん」は、両国の言語でポルチーニ茸を示す単語にちなんで名付けられました。
バラビちゃんのお腹には現地で採れるヘーゼルナッツが入っています。





ユニークな姿のモチーフは、
バルト三国でよく見かける
キノコ型のクルミ割り器。



館内の自動販売機では
両国のアイテムも購入
できました。



タッチパネルには、ゲーム感覚で
ビジョンを共有できるものや、現地の
企業や製品を閲覧できるカタログも。



タッチパネルに触れるだけで「植樹」が!
遠く離れた日本から現地の森を育てる
という夢のある企画。



ラトビアとリトアニアで造成された「KIZUNAの森」に植樹される
苗木。©Janis Abizars

2025年　大阪･関西万博を振り返 って（ナショナルデー）　溝口明子

ナショナルデーについて

会期中、特に大切なイベントの一つが5月20日に開催された「ナショナルデー」でした。

まず、本番に先駆けて5月18日と19日に「いのちの遊び場 クラゲ館」にてウォームアップ･アクティビティが行われました。コンテンツはラトビアの伝統的なオーナメント「プズリ」作りのワークショップと舞踊団「Vektors（ヴェクトルス）」によるフォークダンス。

クラゲ館は小さなお子様連れのご家族が多く、親子で挑戦するハンドクラフトや初めて見たであろうラトビアのダンスの魅力で、新たな層にラトビアのことを知っていただけたのではないかと思います。


ラトビア国旗と日の丸、博覧会国際事務局の旗がたなびく「EXPOナショナルデーホール『レイガーデン』」。


ラトビアでお守りのような存在の「プズリ」作り。©Reinis Olins


「Vektors」は65年以上の歴史を誇る。©Reinis Olins


観客の皆さんも一緒にダンス!



燦然と輝く「ラトビア共和国ナショナルデー」の文字。


国歌とともに両国の国旗が掲揚された。

いよいよナショナルデー当日5月20日。「VOICE and ECHO」と題されたタイトルには、ラトビアが発信する物語と創造性が世界と響き合うようにとの願いが込められていました。

公式式典は、ラトビアと日本の国旗掲揚で始まり、エドガルス･リンケービッチ大統領と藤井比早之外務副大臣によるスピーチが行われました。

大統領のスピーチでは、各関係者への感謝が述べられたほか、今回の万博がラトビアにとって1925年パリ万博への参加から100周年となる特別な意味をもつことや、ラトビアと日本は国家樹立以来100年以上にわたり友好関係を築き、今や政治･経済両面で最も重要なパートナーの一国となっていることが紹介されました。また、「海外旅行が珍しかった時代には、万博は世界への最初の扉だったが、今ではグローバルな課題を解決する目的でつながるものへと役割は変わった。イノベーションを築き、インクルーシブな世界を推進し、技術が進歩する中で人類の価値観をともに守り続けていきたい」という、力強いメッセージも述べられました。



スピーチをするラトビア大統領。©Reinis Olins


オレンジ色のサークルは、立春から冬至にいたる8つの季節の節目を文様で表しており、全体で1年を表現している。


観客を引き込む演舞と演奏。©Reinis Olins



フィナーレで大喝采を浴びる出演者の皆さん。


人々を魅了するパレードの様子。©Reinis Olins


ビジネスフォーラムでスピーチをするラトビア大統領。©Reinis Olins


「プズリ」作りは参加者の波が3日間とも途絶えることはありませんでした。



ナショナルデーを祝してパビリオン前に登場していた特設フォトブース。


当協会もご招待いただいた、夜のレセプションでの大統領のスピーチの様子。


石橋理事長のご挨拶。

続いて、約40分のメインパフォーマンス「ECHO」。春（朝）、夏（昼）、秋（夕）、冬（夜）、4つのサイクルを通したラトビアの物語が、音楽と舞踊、映像によって紡がれるこの日のための特別なプログラムでした。一日の時の流れに加え、めぐる季節とともに夏至祭や冬至祭といった祭祀の要素が散りばめられ、結婚や出産などの人生の節目をも織り込んだ最高のステージ。それをVektorsが見事なフォークダンスとパフォーマンスで魅せ、Instrumenti 、Raxtu　Raxti、Auļi 、Tautumeitas（元）、Sinfonietta Rīgaといったラトビアを代表する音楽チームが支えていました。また、日本との共鳴を示すため、日本人アーティストも参加し、「さくら」のメロディーも取り入れられていました。途中で、ラトビア人が5年に一度集結する壮大な「歌と踊りの祭典」の演出もあり、魂を揺さぶるような圧巻の舞台でした。

その後、パレード、ビジネスフォーラム、会場をパビリオンに移しての「プズリ」作りのワークショップが行われました。いずれも大盛況で、文化的、経済的側面の両方からラトビアへの理解が深まり、日本･ラトビア両国の結びつきがより深くなったのではないかと思います。

2025年　大阪・関西万博を振り 返って（バルトの日）　溝口明子

バルトの日について



1989年8月23日「バルトの道」の実際の写真。©Aivars Liepiņš

もう一つ特別な日となったのが8月23日の「バルトの日」。1989年の同日、バルト三国の人々が旧ソ連からの独立を願って立ち上がった抗議活動「バルトの道」にちなんで行われました。

インターネットなどの連絡手段がない時代に、当局の監視の目を逃れるためにほぼ言伝だけで人々が結集。それは、バルト三国の各首都を結ぶ600kmを、200万人を超える人々が歌いながら手を取り合って繋ぐという、非暴力かつ世界史上でも最大規模の人間の鎖でした。自由と独立を願うとてつもないエネルギーを目の当たりにした時の指導者は、これ以上三国を支配下に置くことはできないと悟ったといいます。

「バルトの日」イベント当日は、ワークショップやステージパフォーマンスなど盛りだくさんの内容でしたが、もっとも象徴的だったのが、「シンボリックな人間の輪」、すなわち「バルトの道」の再現でした。自由と独立、そして平和を今も変わらず願い続けるラトビアとリトアニアの強い想いを伝える場となりました。

パビリオンではこの日限りの民族衣装の展示もありました。民族衣装は両国にとってアイデンティティに直結する大切な存在。説明パネルもそれぞれ添えられていたので、来館者はじっくり鑑賞していました。

また、ラトビア、リトアニア両国の手工芸のワークショップも開催されました。ラトビアが用意したのは、手仕事の至宝、ミトン。ラトビアを代表するニッターさんが来日して直々に手ほどきするとあって、当日は万博開場と同時に参加希望者があふれ、一瞬で予定数が埋まりました。老若男女問わず、編み物の習得度も問わず、さまざまな方が難解なラトビアの編み物に挑戦していました。

パビリオンだけでなく、屋外の「ポップアップステージ西」では、両国それぞれともにユネスコ無形文化遺産である「歌と踊りの祭典」の空気感を感じてもらおうと、熱いステージが繰り広げられました。ラトビアからは「Katrīna Dimanta（カトリーナ・ディマンタ）&band」と、ナショナルデーに続いて舞踊団「Vektors」が来日。力強く、心に響くパフォーマンスで観客を魅了していました。



フォトスポットでは女性と女性の間に立って手を繋ぐと「バルトの道」の一員に。



「歌う国」のバルトらしく、歌でセレモニーがスタート。　©Jānis Spurdziņš



ラトビア共和国文化省、Dace Vilsone（ダツェ・ヴィルソネ）事務次官による式辞。©Jānis Spurdziņš



VIPの方々も手を繋いで「バルトの道」を再現。
©Jānis Spurdziņš



見知らぬ人同士手を繋いで参加し、館内に入りきらないほどの方々が集まった。©Jānis Spurdziņš



大勢の人に囲まれる大人気のバラビちゃん。
©Jānis Spurdziņš



館内では民族衣装計10点が展示されていた。



ミトン編みのワークショップ講師は、ラトビアの民族学者 Ziedīte Muze（ズィエディーテ・ムゼ）さん。



ラトビアの至宝ミトンの特別展示も。



編み物が苦手な方は「デジタル編み物」に挑戦!



Katrīna Dimanta & band
©Jānis Spurdziņš



舞踊団「Vektors」
©Jānis Spurdziņš



みんなで一緒に楽しむ Dančі（ダンチ）の時間も!
©Keizo Ueno



終演後に拍手喝采を浴びるチーム・ラトビア。
©Jānis Spurdziņš

「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマだった万博。バルトパビリオンでは、それぞれの国や民族が大切にしてきた伝統をただ守り、次世代へ引き継ぐだけではなく、人間と自然、テクノロジーを共存させながら、新しい時代へ柔軟に適応させていこうという取り組みを感じました。また、別々の国でありながらも、世界が集う場で力を合わせ、その姿を示すことで、二国間にとどまらない大きな輪を築けることを実証し、深い感銘を受けました。

バルトパビリオンにたくさんのファンができたことも強い印象に残っています。練りに練られたコンセプトと展示やイベントはもちろんですが、何よりも館長を筆頭にしたガイドの皆さんがパビリオンに良い雰囲気を作り、その雰囲気を楽しみに大勢の方が繰り返し来館されました。会期中、バルトパビリオンにはなんと約90万人もの人が訪れたのだそう。ラトビアの人口は約186万人なので、これは信じられないような数字です。実際、来館者の支持を示す「World Expolympics Award　2025」のPeople's Choice Awardでバルトパビリオンは第2位を獲得しました。これほど大きな博覧会でも、やはりつまるところは、人と人との絆なのだと強く感じる万博となりました。

一般の来館者には多くのインスピレーションを与え、ビジネスの交流も多くもたれた今回の万博を契機に、ますます日本とラトビアの関係が発展していくことと確信しています。



People's Choice Awardのトロフィーを手にする Lāsma Līdaka（ラースマ・リーダカ）館長（右）とリトアニア側の責任者リナ・アンタナヴィチエネさん（左）。バルトパビリオンはほかに、ベストユニフォームアワード、ベストパビリオン　マスコットアワード5位も受賞。
©Courtesy of LIAA



ラトビアのスタッフの皆さん。後列左からEvelī Jurkāne（ガイド）、Arturs Galata（ガイド）。前列左からJuta Pīrāga（ビジネスプログラム担当）、Elīna Briede（ガイド）、Solvita Kļaviņa（ガイド）、Lāsma Līdaka（館長）、Elizabete Gibnere（ガイド）、Kārlis Vītols（ガイド）、Laura Rendiniece（ガイド）、Līga Gablika（マーケティング・広報プロジェクト担当）。Liels paldies!
©Courtesy of LIAA



国家最高勲章「クロス・オブ・レコグニション」受章に際して

Riga Wood Japan代表
上野 慶三

2025年5月4日、ラトビア独立回復宣言35周年記念日に、25年以上にわたり経済・親睦に貢献した功績が認められ、エドガルス・リンケービッチ大統領より国家最高勲章「クロス・オブ・レコグニション」を賜りました。

私とラトビアとの関わりは、合板を基幹産業とするラトビアとの出会いから始まりました。1969年に大学の林産化学科を卒業し、合板会社へ入社して以来、東南アジアへの視察を重ね、合板製造一筋の人生でした。卒業翌年の1970年、大阪万博は、大阪で育った私にとって夢と希望に満ちた特別な場所でした。それから55年後の2025年4月13日、大阪・関西万博の開幕日。バルトパビリオンのオープンに際し、石橋名誉領事、関西日本ラトビア協会理事の皆様とともに、胸を躍らせながら参加しました。

5月4日にはラトビア独立回復35周年記念式典において、リンケービッチ大統領より叙勲を賜りました。そして5月20日、万博のラトビア・ナショナルデーで来日された大統領と再会し、午餐会・晩餐会では、この勲章に恥じることのないよう、バルトパビリオン成功のため尽力することを改めてお誓いしました。私は業界関係者や知人をバルトパビリオンへご案内し、ラースマ館長とソルヴィタ副館長から500名を超える来館者へ記念品をご用意いただきました。「ラトビアが大好きになった」と再び訪れてくださる方が数多くいらして、とても嬉しく思いました。夏の猛暑の中でも、バルトパビリオンのスタッフは母国への愛情を胸に、満面の笑顔で来場者を迎えていました。その姿に心を打たれ、私は毎日のようにおにぎり50個とスイカ、野菜ジュースを届けて応援しました。バルトパビリオンのお手伝いを通して、55年前の青春を思い出す、私にとって最高の万博となりました。また、今年2月には東京ビッグサイトで開催されたラトビア白樺合板の展示会に、ズィルガルヴィス大使、アルタさんのご支援・ご協力をいただき参加しました。多くの方から「万博のバルトパビリオンは良かった」と声を掛けていただき、感無量の思いでした。

木材は、緯度や気候によって同じ樹種でも密度が異なり、



ラトビアとの歩みの原点

柔らかく軽い製品にも、強度のある重い製品にもなります。日本は、木材の特性を生かしたものづくりや販売に優れた国です。2000年、「ラトビアの合板工場視察調査」の依頼を受けました。快諾した理由は二つあり、一つは「世界中の木を見てみたい」という思い、そしてもう一つは、初めて耳にしたラトビアという国が「生涯、自分のお金では絶対に行けない国」だと思ったからです。訪問先は、世界でも最も歴史ある合板メーカーの一つであるラトビアス・フィニエリス社でした。1873年の創業以来、ドイツ統治時代やソ連時代など幾度もの苦難を乗り越え、今日まで存続してきた歴史ある企業です。工場視察と技術指導は、工場長をはじめ現場の皆さんと真剣勝負の1カ月でした。日本語・英語・ロシア語でまとめた報告書は「これはバイブルだ!」と高く評価され、「この内容が実現するまで技術指導を続けてほしい」とご依頼をいただきました。そのご縁から、2004年5月1日、ラトビアのNATO・EU加盟式典に招待されました。そして、日本でラトビア白樺合板を販売してほしいとの要請を受け、「Riga Wood Japan」を設立し、今日に至っています。

初めて訪れたラトビアは、「バルトのパリ」「バルト海の真珠」と称されるほど美しい国でした。世界遺産の街並みを有し、日本と同等以上に治安が良く、人々は勤勉で温厚です。日本人にも深い信頼と友情を寄せ、訪れるたびに新たな魅力で迎えてくれます。国土には12,000を超える川と2,256の湖があり、最高峰のガイジンカルンス山でも標高は312m。1606年に





は国策として植林を始め、世界でも最も早く持続可能な森林経営を実現した国の一つです。国樹である父の木・オーク、母の木・リンデン（菩提樹）、そして「白樺はゴールド」と称される白樺への深い愛情に触れ、私は「余生はラトビア白樺とともに歩もう」と決意しました。

ラトビアには、1873年から続く「歌と踊りの祭典」があります。5年に一度開催されるこの祭典は、歌と言葉で歴史や文化を受け継いできたラトビア人の誇りであり、魂の叫びともいえる伝統行事です。私は2003年より連続で5回参加し、次回2028年も、ぜひ関西日本ラトビア協会の仲間とともに参加したいと願っています。

また、2018年にはウズヴァラス公園で、留学生7名と白樺ジュースを飲みながら花見を楽しみました。この交流は年々広がり、2025年には170名、2026年には150名の留学生や在ラトビア日本国大使館関係者、日本人の皆様にもご参加いただくなど、毎年4月末の恒例行事となっています。

私にとって、Riga Wood Japanの活動を支える大きな力となったのが、2008年の在大阪ラトビア共和国名誉領事館開設と、関西日本ラトビア協会の設立でした。ラトビア製品を販売し始めた当初は、ラトビアはどこにある国か、という説明から始めなければならない時代でした。しかし、東郷前名誉領事ご夫妻のご自宅で開催された新年会や夏至祭（Līgo）をはじめ、ラトビア語教室や訪問ツアー、懇親会、トークサロン、来日した政財界関係者との交流などを通じてラトビアの認知度は少しずつ高まっていきました。さらに、2014年に石橋名誉領事が就任されてからは法人会員の募集が始まり、現在では100社近くが入会しています。そのおかげで、業界におけるラトビアの認知度も一層高まりました。また、ラトビアと日本の相互留学生への奨学金授与、在ラトビア日本国大使館主催の日本語弁論大会優勝者への日本渡航チケット贈呈、関西国際交流センターによるラトビア研修生の受け入れなど、多くの交流事業が続けられています。こうした積み重ねにより、日本はラトビアにおいて厚い信頼を寄せていただける存在となっています。

このたび、2025年5月4日のラトビア独立回復35周年にあたり、エドガルス・リンケービッチ大統領より、25年以上にわたりラトビアとの経済・親睦に貢献した功績を認めていただき、国家最高勲章「クロス・オブ・レコグニション」を賜りました。この栄誉は、白樺合板の販売だけでなく、関西日本ラトビア協会常務理事として、経済・文化・教育・親善交流に携わってきた活動を評価いただけたものと受け止めています。これまで支えてくださった関西日本ラトビア協会の皆様をはじめ、ラトビア共和国名誉領事館、Riga Wood Japanに関わる皆様、そして日本とラトビアの友人の皆様に、心より感謝申し上げます。叙勲式では、ラトビア全国放送のインタビューで次のようにご挨拶させていただきました。「ラトビアの友こそ、わが人生の宝物です。この栄誉を心に刻み、この素晴らしい勲章に恥じることのないよう、これからもラトビアと日本の経済・文化・親睦のために精進してまいります。」

ラトビアとの出会いから25年以上。木材とのご縁から始まった交流は、多くの出会いに支えられ、私の人生を豊かにしてくれました。これからも、一人でも多くの方にラトビアの魅力を知っていただき、日本とラトビアを結ぶ架け橋として、微力ながら歩み続けてまいります。



2025 4.26

上野常務理事主催のウズヴァラス公園でのお花見開催

毎年上野常務理事が主催されているウズヴァラス公園でのお花見が今年も開催されました。留学生、在留日本人、日本に何らかの接点があるラトビア人など約170人もの方々が集まり、楽しい時間を過ごされました。









2025 5.4

上野常務理事がラトビア国家最高勲章「クロス・オブ・レコグニション」を受章

ラトビアと日本の交流に長年尽力されてきた上野常務理事が、ラトビアのリンケービッチ大統領より国家勲章「クロス・オブ・レコグニション」を授与されました。おめでとうございます!

（P9・10「寄稿『国家最高勲章「クロス・オブ・レコグニション」受章に際して』参照」）

2025 6.2〜13

「2025年度 DX次世代リーダー交流事業（NextStatX 2025）」へ協力

（公財）統計情報研究開発センターと（一財）青少年国際交流推進センターが主催し、関西日本ラトビア協会も協力させていただいた「2025年度　統計・DX次世代リーダー交流事業（NextStatX 2025）」が8名のラトビア青年を迎えて無事に終了しました。

本事業は、ITスタートアップが多く育ち、デジタル・トランスフォーメーション（DX）分野において先進的なラトビア共和国の青年を日本に招へいし、互いの国の取組みについて情報交換及び討議することで両国の発展に寄与することを目的に企画されました。

総務省統計局やデジタル庁、データサイエンス専攻の大学生訪問などの交流を行う一方で、文化歴史体験を通じて日本への理解を深めた青年たちが、将来にわたってラトビアと日本の架け橋となっていただけるものと思います。















2025 6.20

駐日ラトビア共和国大使館にて開催された夏至祭（Līgo）に参加

6月20日（金）夕刻、駐日ラトビア共和国大使館にて夏至祭（Līgo）が開催されました。Līgoは、1年で最も夜の短いこの日に太陽へ感謝し豊作を願う、ラトビア伝統のお祭りです。

ラトビアにゆかりのある方々が集う夕暮れ時の会場で、色とりどりの花冠と民族衣装をまとった、合唱団ガイスマのパワフルな歌声で幕開け。伝統料理「シャルティバルシチェイ」（ビーツとヨーグルトのスープ）、黒パン、チーズなどお味はもちろんのこと、見た目にも美しいお料理がたくさん並びました。

合唱団ガイスマの皆さまはフィナーレでも心のこもった素敵な歌声を披露してくださいました。

ラトビアと日本とのつながりを改めて感じられる、心温まるひとときでした。







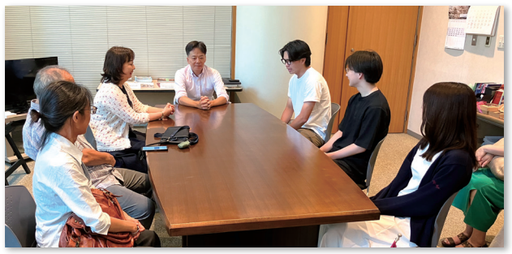


2025 7.16

ラトビアに留学予定の学生3名が名誉領事館に訪問

ラトビアに留学予定の関西学院大学の学生3名が名誉領事館に訪問されました。

上野常務理事、池田常務理事、協会会員の今西会員や、現在ラトビアに留学されている学生や留学から帰ってこられた学生から色々な情報提供を受け、留学を心待ちにされている様子でした。







2025 8.22

「ラトビア共和国文化省 来日レセプション」を開催

大阪・関西万博のイベント「バルトの日」のために来日された、ラトビア共和国文化省をお迎えしたレセプション「ラトビア共和国文化省 来日レセプション」を開催しました。

ラトビア共和国文化省事務次官 ダツェ・ヴィルソネ様を始め、クリエイティブ産業部長 ラースマ・クラスティニャーシドレンコ様、大阪・関西万博バルトパビリオン副館長 ソルヴィタ・クリャヴィニャ様、駐日ラトビア共和国特命全権大使 ズィグマールス・ズィルガルヴィス大使、大阪・関西万博ラトビアコミッショナーのラースマ・リーダカ様にご出席いただき、当協会からは、石橋理事長、上野常務理事、池田常務理事、溝口常務理事、竹村理事、大仁理事、平越理事、上平理事にご参加いただきました。

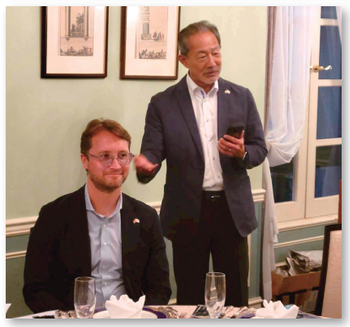
ヴィルソネ様をはじめ、お迎えした皆さまとラトビアのビジネスについてや大阪・関西万博についてなどお話しさせていただくことができました。普段なかなかお会いすることができない方々と大阪で交流を持つことができ、懇親を深める素晴らしい機会となりました。















2025 8.29

トークサロン開催（立花実咲さん）







当協会の奨学生で、2023年9月からラトビア大学修士課程にて文化人類学を学ばれた立花実咲さんをスピーカーとしてお迎えしました。ラトビアに興味を持ったきっかけや大学で学ばれていたことなど、ご自身で体験されたことなどをとてもわかりやすくお話しいただきました。今後もこの2年間の修士課程の経験を生かしてご活躍いただければと思います。



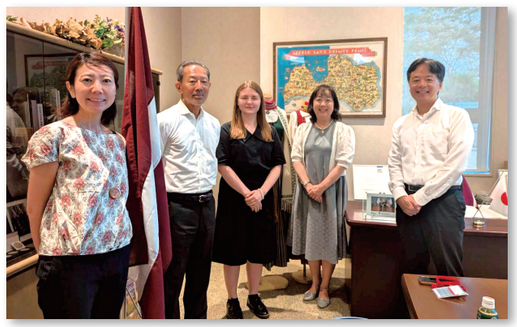
2025 9.7

日本語学習者訪日研修 研修生のリーヴァさんが名誉領事館訪問

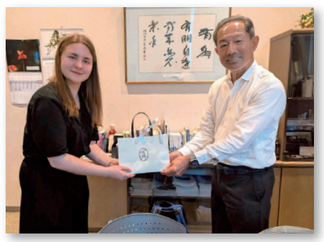
訪日日本語研修生のリーヴァさんが名誉領事館を訪ねてくださいました。石橋理事長、協会メンバーと茶話会を開催し本国での仕事について、また来日の感想などをお話しいただきました。

リーヴァさんは、国会図書館で勤務されているとのこと、当協会で計画しつつもコロナ禍でストップしている、日ラ図書交流事業についても意見交換しました。









2025 9.7

クルディーガ市のアスタシェフスカ市長、サフォノフス事務局長、富士市副市長などが名誉領事館訪問

クルディーガ市のアスタシェフスカ市長、サフォノフス事務局長、富士市の森田副市長と富士市交流観光課の皆さま、そして富士市国際教育ネットワークの山口代表とそのメンバーの皆さまが名誉領事館を訪ねてくださいました。協会側は、石橋理事長はじめ協会メンバーでお迎えをし、時間の許す限り情報交換をさせていただきました。

ラトビア共和国と富士市は、ボーイスカウトでの交流や2020年の東京オリンピック・パラリンピックでホストタウンとなるなど、関係を深めてこられました。

また2024年、富士市長を代表とする訪問団がクルディーガ市を訪問され今後の両市の交流と連携促進を願われました。今回の来日で、その願いが実り富士市とクルディーガ市は、産業、教育、文化の分野における連携協定を取り交わしました。神戸市、東川町、そしてこの富士市と、国と国だけでなく、街と街との繋がりがこれから先も増えていくことを願っています。











2025 9.10

神戸龍谷高校からリーガ文化学校への交流活動の事前学習

2025年も神戸龍谷高校とリーガ文化学校の交流活動が行われるとのことで、溝口常務理事のラトビア雑貨店「SUBARU」にて、生徒さんが事前学習をされました。

リーガ文化学校からは9月下旬に日本へ、神戸龍谷高校からは10月下旬にラトビアへ、相互に2名が訪問しホームステイをしながら学校へ通います。



2025 9.16

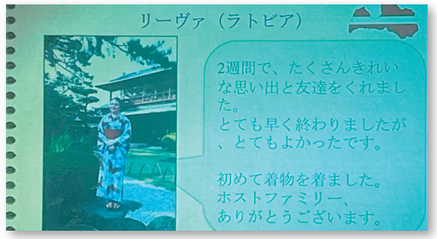
「日本語学習者訪日研修」の修了証授与式、歓送会を開催

国際交流基金 関西国際センター（大阪府泉南郡）で「日本語学習者訪日研修」の修了証授与式、歓送会が開催されました。当協会が招へいしましたリーヴァさん含め43カ国43名の皆さんが無事に修了式を迎えました。

約2週間、日本の文化・芸術を学び、そして、ここ大阪泉南の地元家族の下でホームビジットも体験されました。歓送会ではこの2週間をまとめた映像の上映や研修者による歌のパフォーマンスなどがあり、最後に全員で「今日の日はさようなら」を日本語で合唱してくれました。

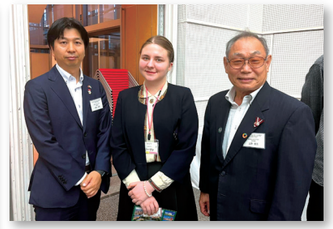
リーヴァさんは来日してさらに日本を好きになったようで、「もっと日本語を勉強して、また日本に来ます!」と力強く語っていました。











2025 9.20

バイバ・ブラジェ外務大臣等をお迎え

バイバ・ブラジェ外務大臣、カスパルス・クルムホルツ外務大臣室長、ズィルガルヴィス大使、バルトパビリオン館長　ラースマ・リーダカ様を、石橋理事長、上野常務理事、今西会員と事務局でお迎えしました。今回の訪日の印象、経済情勢及びビジネス交流の展望、食文化やスポーツ、大阪・関西万博の話等、情報交換をし懇親を深めました。







2025 10.14

大阪・関西万博慰労会を開催

当協会の石橋理事長と上野常務理事の発案で、大阪・関西万博バルトパビリオン関係者の慰労会を開催しました。ラースマ・リーダカ様、ソルヴィタ・クリャヴィニャ様、スタッフの方々など8名がお越しくださり、皆さまのご活躍を称えるともに万博およびバルトパビリオンの成功を喜び合いました。









2025 10.23

トークサロン開催（ダニエルス・ツィングエブスさん）

2025年2月7日に行われた第23回ラトビア日本語弁論大会にて優勝されたダニエルス・ツィングエブスさんが、賞品であるラトビアと日本の往復航空券を使用して来日されました。

そこで、大阪にもお寄りいただき、トークサロンのスピーカーとしてお迎えしました。

「心でつながる日本とラトビア―文化の共鳴から経済協力へ」というテーマで、ご自身で考えた内容をすべて日本語で発表していただきました。時折原稿を見ながらの発表でしたが、その原稿もすべて日本語（漢字も含まれていました）で書かれており、とても高いレベルの日本語での発表でした。

また、発表内容も文化と経済というとても知識と教養が必要な分野ですが、まだ大学生にもかかわらず、ご自身の意見を持ってきちんとお話しいただいていることに大変感銘を受けました。

今後も日本を愛していただき、ぜひ世界で活躍する人材になっていただければと思います。



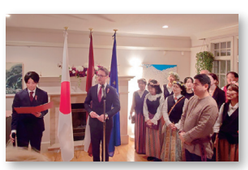




2025 11.14

ラトビア共和国独立記念セレモニーに参加

駐日ラトビア大使館において開催されましたラトビア共和国独立記念セレモニーに石橋理事長ご夫妻をはじめ、多くの協会メンバーが参加しました。国光あやの外務副大臣、中曽根弘文日本・ラトビア友好議員連盟会長もご出席され、多くのラトビア関係者と記念すべき日をお祝いしました。その後の二次会にも多くのメンバーが参加し懇親を深めました。











第17回 関西日本ラトビア協会 総会･懇親会

■ 日時：2025年11月26日（水）
■ 場所：ザ･リッツ･カールトン大阪「ザ･ガーデンルーム」

《式 次 第》

【総　会】（16時00分　開会）
主催者挨拶　石橋 民生 理事長（在大阪ラトビア共和国名誉領事）
2024年度 事業報告･監査報告　事務局
2025年度 事業計画･活動計画　事務局

【講演会】講　　師　駐日ラトビア共和国 特命全権大使
ズィグマールス･ズィルガルヴィス様
ラトビア投資開発庁　コミッショナージェネラル
ラースマ･リーダカ氏（バルトパビリオン館長）
演　　題　『ラトビアは大阪･関西万博へ』

【演奏会】弦楽四重奏による演奏会（大阪交響楽団）

【懇親会】（17時10分　開宴）
ご 挨 拶　三澤 康 様　政府代表／特命全権大使（関西担当）
乾　　杯　池田常務理事
中 締 め　溝口常務理事


三澤　康
政府代表／
特命全権大使
（関西担当）


池田常務理事


溝口常務理事







総会／石橋理事長 挨拶



本日は皆さまお忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。ズィルガルヴィス大使、三澤大使、ラースマさん、アルタさん、今日はお越しいただきまして、本当にありがとうございます。今年は万博の関係で、大統領、外務大臣、文化庁事務次官、リーガ市長など、ラトビアからたくさんの方がいらっしゃいました。万博のバルトパビリオンの館長をされていましたラースマさんをはじめ、優秀なガイドの方々がラトビアの文化を日本に対して紹介するという、非常に重要な仕事を見事にやり遂げられましたことを本当にお祝い申し上げたいと思います。もちろん理事の方々、事務局の方々や会員の方々にも非常にご協力いただいていまして、本当にありがとうございます。今日は大使と館長より、その万博のお話をしていただけるということですので、楽しみにしております。

万博以外には、統計情報研究開発センターという財団法人と青少年国際交流推進センターが、2024年に引き続きラトビアの学生を8名招へいしていただきまして、総務大臣と面会するなど、非常に豪華な事業となったと伺っております。加えて、日本財団も優秀な学生を招へいしていますが、ラトビア人が1名入っているとのことで、まだコンタクトできていないですが我々も何かサポートできたらなと思っております。他の組織とも協力しながら、学生の支援を継続してやっていきたいと思います。

また2024年から、名古屋で天野さんが名誉領事に就任されていますが、名古屋とも一緒に協力して、ラトビアとの交流を深めていきたいと思います。加えて、後ほど紹介がありますが、新たに今西理事をお迎えすることになりました。会員の皆さんと一緒になって活発に活動を推進していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【講演会】

『ラトビアは大阪･関西万博へ』

講師　駐日ラトビア共和国 特命全権大使
ズィグマールス･ズィルガルヴィス大使

〈略歴〉
2022年8月　駐日大使にご就任。2004年からラトビア共和国外務省に勤務、在アラブ首長国連邦　臨時代理大使　外務省対外貿易･対外経済関係推進部長等を歴任されております。



三澤大使、石橋理事長、そして関西日本ラトビア協会の皆さま、こんにちは。

2025年は、日本とラトビアの二国間関係において、最も活発で生産的な一年であったということを申し上げたいと思います。もちろん、その大きな理由は私たちが大阪･関西万博に参加したことにあります。万博スタート前の年初からすでにラトビアからの要人による訪日が続きました。

そして2025年の最大の出来事は、間違いなく5月のラトビア大統領の訪日でした。大統領は官邸を訪れ、当時の石破首相との首脳会談を行い、日本とラトビアの関係を「戦略的パートナーシップ」へ引き上げることで合意しました。戦略的パートナーシップの概念や内容そのものについて、ここで詳しく触れるつもりはありませんが、なぜそれが実現したのか、なぜそれが重要なのかを一言述べたいと思います。それは、ラトビアと日本という二国間の「相互信頼」が確固たるものであることの証であるということです。

さて、話を万博に戻しますが、万博は単なる展示会でも、来場者向けの娯楽だけでもありません。日本ではまだ十分に知られていないかもしれないラトビアという国を、技術的に進んだ、そして親しみやすい国として日本の皆さまに紹介する素晴らしい機会であり、最高の場でもありました。この点についてはラースマが詳しく触れると思いますが、私からも改めて申し上げたいのは、私たちの参加、そしてパビリオンは大成功だったということです。90万人もの方々にバルトパビリオンを訪問していただきました。そしてこの成功の大部分は、関西日本ラトビア協会の皆さまのおかげです。心から感謝申し上げます。皆さまのご支援は精神的なものだけでなく、万博参加の準備段階、開催中、そして終了後に至るまでの実務的な支援としても寄せられました。

そして私が皆さまに強く申し上げたいのは、ラトビアの言い回しで言うところの「成功の上に眠ってはいけない」ということです。この勢いを活かし、日本とラトビアの関係をさらに発展させていかなければなりません。皆さまの中には、すでにラトビアとビジネスをされている方もいると伺っています。ぜひ今回の成功をきっかけとして、交流を継続し、深化させ、ラトビアを訪れ、ラトビアの人々を日本へ招くなど、活動を続けていただければと思います。

これまでと同じ熱意で関係を築き続けましょう。これまでも簡単な道のりではありませんでしたが、これは私たちの協力関係を次の段階へ進める“始まり”にすぎません。

それでは私の短い挨拶を終え、パビリオンのコミッショナージェネラルとして成功に大きく貢献してくれた、ラースマにバトンを渡したいと思います。

ラースマには、パビリオンがどのようなものだったかという説明だけではなく、どのような成果があり、どんな教訓が得られ、それらを大阪･関西地域だけでなく日本全体、さらにはより広いラトビアとの関係にどのように生かしていくべきかを中心に話してもらいたいと思っています。ありがとうございました。



ラトビア投資開発庁
コミッショナージェネラル
ラースマ　リーダカ氏
（バルトパビリオン館長）

三澤大使、ズィルガルヴィス大使、そして石橋理事長。本日はここに来られて、とても嬉しく思います。

まず、万博について簡単にご説明します。万博とは、5年に一度開催される世界的な博覧会で、約170年以上続く伝統があります。ご存じのとおり、4月13日から10月13日まで夢洲で開催されました。今回の万博会場は「いのちを救う」「いのちをつなぐ」「いのちに力を与える」の3つのゾーンに分かれていました。これは、万博のテーマが「いのち輝く未来社会のデザイン」であることに基づいています。158の国･地域と7つの国際機関が参加し、来場者数は2,900万人に達し、主催者の予想を上回りました。

ご存じでない方も多いと思いますが、ラトビアが初めて万博に参加してから今年で100周年を迎えます。実は、ラトビアが初めて参加したのは1925年のパリ万博なのです。さらに興味深いことに、1937年のパリ万博も共同参画でした（バルト三国での共同参画）。今回の万博への参加目的は、「ラトビアという国の認知度向上」「観光地としての魅力発信」だけでなく、経済的な目標もありました。例として、2028年までに「ラトビア企業の対日輸出を5,000万ユーロ増やす」「日本発の投資を3,000万ユーロ増やす」というものです。

パビリオンについては、リトアニアと共同でパビリオンを構えました。EUパビリオンの隣という、非常に良い場所でした。パビリオンの広さは約300㎡です。私たちが目指したのは、年齢・性別・文化に関係なく、すべての人が集まり交流できる場所をつくることでした。ラトビアと日本の距離は約11,000km離れていますが、私たちは「心は近い」と考えています。そして、ラトビア（Latvia）とリトアニア（Lithuania）の単語に共通する「L」から、ロゴのアイデアが生まれました。（私の名前にも「L」が入っていますので、気に入っています）。ラトビアとリトアニアはバルト地域を代表し、日本の皆さんにバルト三国の共通点とつながりを感じてもらうことを目指しました。人と人、国と国が出会うことで「会話」「議論」「夢」が生まれます。

その象徴として「WE ARE ONE」をテーマに据えました。私たちは皆、たった一つの美しい地球の住民です。未来の世代のために地球を守る責任があります。

動画でも述べられていた通り、パビリオンの入口にはスマートガラスの外観があり、パビリオン内の「自然の薬局」や「KIZUNAの壁」はとても人気がありました。そしてデジタルでの植樹体験は、デジタルで植樹したものが実際に植樹されます。これは来場者の間で非常に有名になりました。そして、私たちの最も有名なマスコットである「バラビちゃん」。バラビちゃんはラトビアのキノコ狩りの伝統から着想を得ています。正直に言うと、当初、バラビちゃんは本当に人気が出るのか確信が持てませんでした。しかし今では非常に人気があり、私たちはとても誇りに思っています。

また、私たちのパビリオンの運営には多くのチームが関わりました。ラトビア投資開発庁、リトアニア政府、そしてクリエイティブチームです。またオーガナイザーとしてはリトアニア側のリナもパートナーでした（リナも名前に「L」が入っていますので、わざと「L」が入った人を連れてきたように見えますね）。スタッフ全員は紹介しきれませんが、2名だけ特別に紹介させてください。デザイナーのアーサー・アナルツはKIZUNAの壁のデザイナーで、それによりロンドン・デザイン・ビエンナーレの金賞を受賞しました。そしてラウラ・スラヴィニャはバルトパビリオンのコンセプトクリエーターです。

主要イベントについてですが、何より印象的だったのはナショナルデーです。おそらく皆さんにとっても印象的な日だったと思います。コンサート、ビジネスフォーラム、ワークショップなど、多くの活動を行いました。またもう一つの大きなイベントは、8月23日の「バルトの日」です。これは、三つの国が昔、象徴的に手を取り合い、団結を示した重要な日です。パビリオンで手をつなぐイベントやコンサートを実施し、団結と友情を祝う美しい日となりました。

ビジネス面では、パビリオン内に自動販売機を設置し、そこでラトビアとリトアニアの商品を購入することができました。両国の企業情報を閲覧できるデジタル・ビジネスカタログの設置や、最先端企業を紹介するビデオも展示しました。さらに、ナショナルデー期間中を含め、複数のビジネスフォーラムを開催しました。またEU主催のイベントにも参加し、その映画祭ではラトビアの映画が上映され、ラトビアのデザイナーがデザイン展に、アニメーション作家はアニメーション展に、アート作家はインテリジェンス展など多くの活動に参加しました。

ラトビアの外務大臣や大統領と日本企業との協力協定締結式なども行いました。このように、パビリオン内の活動だけではなく、パビリオン以外で行った広範囲なビジネス活動もとても重要でした。通常であれば1～2程度しか参加できませんが、今年はラトビア企業が10以上もの展示会に参加しました。食品からデザイン、ICT、スマートエネルギーまで、幅広い分野で日本との連携の可能性を感じています。

メディアへの露出も多くあり、特にミャクミャクが姿を消した事件は大きな話題となりました。来場者から多くのぬいぐるみ、折り紙、心温まるメッセージをいただき、深く感動しました。このミャクミャクたちを、大阪母子医療センターにプレゼントしました。またミャクミャクだけでなく、バラビちゃんの人気も出て、絵やTシャツなどになりました。

これらの結果、バルトパビリオンには90万人が訪れ、デジタルスクリーンでの植樹によって42万本以上の木が後日植樹される予定です。そして、ベストユニフォームアワード1位、来場者賞2位、ベストパビリオンマスコット賞5位など多くの賞を受賞しました。また1,800件以上のメディア掲載があり、8,000万人に視聴されました。

ビジネスプログラムには200社以上が参加し、1,800件のビジネスチャンス、34件の協定が締結され、75件以上のイベントを開催しました。

2025年12月や2026年に向けて複数の展示会への参加を予定しており、食品、ICT、電子、スタートアップの分野で日本との連携を強化する予定です。一度だけではなく、長期的に継続して取り組んでいく必要があると思っています。

そして、これが私のプレゼンテーションの最後になります。皆さん、本当にありがとうございました。大阪で支えてくれた皆さまやリーガのチーム、協力いただいた大使館、そして参加していただいた全ての皆さんに感謝します。万博は素晴らしいイベントでした。来年もビジネスイベントを続けていきますが、皆さんにもぜひ参加していただきたいのです。なぜなら、ズィルガルヴィス大使だけでなく、皆さんもラトビアの「大使」だからです。ラトビアを紹介する資料を持ってきていますので、ぜひお持ち帰りください。そしてラトビア投資開発庁のウェブサイトを日本語で閲覧することができるようになりました。文化やビジネスなどの情報が掲載されていますので、ぜひご覧ください。

今後もラトビアと日本の強い友好関係を祈っております。ありがとうございました。



懇親会／ 三澤大使挨拶 【ご来賓 挨拶】

皆さん、こんばんは。本日、この関西日本ラトビア協会の懇親会に参加させていただきまして、非常に嬉しく思います。この場をお借りしまして、ズィルガルヴィス大使、石橋理事長、バルトパビリオン館長のラースマ・リーダカさん、アルタさん、日本とラトビアの友好関係の促進に尽力されてこられましたすべての皆様方に心から感謝を申し上げたいと思います。

ズィルガルヴィス大使やラースマさんもおっしゃっていたとおり、5月20日に万博でナショナルデーのセレモニーが行われました。5月20日の万博のナショナルデーには、大統領および皆様方に1日お付き合いをさせていただきまして、セレモニー、行事、ランチ、およびバルトパビリオンへの訪問をご一緒させていただきました。実は私が最初にバルトパビリオンに行ったのは、開会してすぐの頃の4月14日、開会式の翌日の9時半でした。その時は来館者1人2人しかおらず、本当に丁寧にスタッフの方にご案内いただきました。バーチャルの植樹を楽しいなと思って喜んでやったのですが、最後に二次元コードを撮るのを忘れてしまいました。これが万博期間中で最大の私のミスで、今も非常に残念に思っております。登録をしていれば自分がバーチャルで植えた木が実際にどこに植えられたかやどう育ったかをフォローができるはずだったので、残念だなと思っています。そしてその次に訪問させていただくのが先ほど申し上げたナショナルデーの5月20日でした。その時にはバルトパビリオンには既にミャクミャクが山のように並んでいて、そのような場に大統領や大使とご一緒に訪問させていただくことができ、本当に素晴らしい出来事だったと思います。たくさんの方がミャクミャクグッズを寄付されたので、バルトパビリオンの入口のデスクが埋め尽くされていて本当に心温まりました。国と国とのつながりや友情というのは式典、署名式や合意書みたいなものというよりは、本当にちょっとした優しさとか、ユーモアとか、それから一緒に共有した経験というのがベースになるなと思っています。ラトビアは今後デジタル革新、文化、国際社会への関与ということで、さらに発展していくと思いますが、日本は引き続き誠実で信頼できるパートナーでありたいと思っています。大阪・関西万博はすでに多くの思い出を残しておりますが、ラトビアの存在はその中でも特に心に残るレガシーの一つになると思います。ズィルガルヴィス大使やラースマさんもおっしゃっていたように、万博が終わりましたけれども、万博を通じて得られた経験や財産というものを最大限活用して、それでまたラトビアと日本の関係の強化に努めていくことが必要かと思っています。

懇親会／ 池田常務理事挨拶 【乾杯】

Labdien!（こんにちは）Mani sauc Yuko Ikeda（私の名前は池田裕子です）。これが私の知っている限りのラトビア語です。

今日は、ラトビアで今でもよく知られているイアン・オゾリン（ヤニス・ブルトニエクスとしても知られる）について、少しお話ししたいと思います。

私が関西学院大学で働いていたとき、彼に関する興味深い古い資料を見つけました。古い記録によると、彼は1918年から1921年まで関西学院で英語を教えていたそうです。彼の教え子たちは、彼についての思い出を書き残しています。学生たちから大変愛され、大きな影響を与えた人物だったようで、ある学生は彼を「16カ国語を話す語学の天才」と表現していました。そして彼は教師の傍ら神戸でラトビア領事として活動を始めました。私は彼についてとても興味を持ち、彼について記事を書くことに決め、それが2007年に関西学院のアーカイブニュースレターで発表されました。

1カ月後、私は東京のラトビア大使館から電話を受けました。これが私とラトビアとのつながりの始まりです。そしてとても興味深いことに、同じ日に私はまた別の電話を受けました。今度はロシアの研究者からで、彼は「ロシア史の研究をしてくれてありがとうございます。私たちロシア人にとって新しい歴史です。」と言いました。しかし、私はラトビアを選びました（笑）。その後、私は3月に東京の大使館を訪れました。

そして今日、ここで第4代大使のズィルガルヴィス大使をお迎えできてとても嬉しく思います。イアン・オゾリンさんと一緒に祝杯をあげたいと思います。彼もきっと喜んでくれるでしょう。

それではラトビア語で乾杯しましょう。

Priekā!（乾杯!）

懇親会／ 溝口常務理事挨拶 【中締め】

今日は事務局の皆様のご尽力によって、ズィルガルヴィス大使、ラースマ館長、アルタさん、そしてガイドをされていましたアルトゥルさん、また協会の皆様やラトビアと日本の架け橋となるべく日々活躍されている皆様がここで一堂に会して総会・懇親会ができたことは、この万博イヤーの締めにふさわしいものだったと思っています。ちょっと個人的な思い出になりますが、私はバルトパビリオンでチームの一員として仕事をさせていただきました。私はラトビアに行ってから16年経ちますが、16年の間でラトビアの皆様からいただいてきた真心への恩返しになると思って精一杯勤めたのですけれども、それ以上に他ではできない経験ができて、一生忘れることのできない思い出ができました。このような機会をくれたラースマさんに改めて感謝したいと思います。今日は、先ほど三澤大使の話にもありましたが、交流・ビジネスという大きな場面でも、外交でも個人的なことでも、やはり最終的には人と人だと思います。パビリオンではガイドの皆さんが本当に真心を持って、来館者の人に接してくださって、本当に人と人の絆が深まったと思っています。そして先ほど東郷さんがご紹介されていましたが、何もなかったところにカッタイスさんや、そしてその後、東郷さんはじめ協会の皆様が交流の種をまいて、それが育ってきて今があって、これからますます文化交流を超えて外交や産業で協力関係が、さらに万博を契機に深まっていくと本当に確信しています。

では、中締めということで、一本締めで締めさせていただきたいと思います。皆様のご健勝と、日本とラトビアの更なる友好の発展を祈念して、掛け声はラトビア語で1、2、3、「viens」「divi」「trīs」でいきたいと思います。

では皆様、お手を拝借。viens divi trīs!

2025 12.6

アルトゥルさんとSUBARUでワークショップを開催

万博のガイドを務めたアルトゥルさんとクリスマス支度を楽しむワークショップを開催しました。伝統的なオーナメントを作ってクリスマスツリーに飾りつけし、ラトビアのお茶菓子をお供に、アルトゥルさんからラトビアのクリスマスや冬事情についてのお話しを聞きました。終始和やかな時間となりました。





2026 1.16

トークサロン開催（イエヴァ・ベケレさん）



当協会の奨学生で、2025年9月から2026年1月まで関西学院大学に留学されていたイエヴァ・ベケレさんをスピーカーとしてお迎えしました。

日本で勉強された内容や日本で経験した文化等についてお話しいただき、とても充実した生活を送られていることが伝わってきました。

将来の目標は「ラトビアと日本をつなぐ架け橋になること」とのことですので、イエヴァさんのこれからの活躍を期待したいと思います。





2026 2.13

東京ビッグサイトのRiga Wood Japan展示ブースにズィルガルヴィス大使が訪問

上野常務理事が代表を務めておられる「Riga Wood Japan」が第46回ジャパン建材フェアに出展され、ラトビア白樺合板の紹介をされました。

「万博でラトビアを知った」と言ってブースにお越しくださる方も多く、鹿児島や札幌からの来場者もカタログやサンプルを持ち帰っていただいたそうです。

そしてズィルガルヴィス大使もブースにお越しくださり、来場者の方々と写真撮影をしていただきました。また、ラトビア投資開発庁のアルタさんもサポートをしていただきました。







2026 3.7

BSテレ東4K「おんがく交差点」に溝口常務理事が出演

春風亭小朝さんがMCを務めるBSテレ東4K「おんがく交差点」に溝口常務理事が出演し、ラトビアの伝統楽器クアクレを紹介しました。また、ラトビア民謡のソロ演奏のほか、バイオリニストの大谷康子さんやピアニストの松本和将さんともラトビアの楽曲を演奏しました。






関西日本ラトビア協会会員

法人会員

50音順（2026年3月31日現在）

株式会社アサノ	三京化成株式会社	株式会社東芝
朝日ウッドテック株式会社	株式会社山水	株式会社南都銀行
株式会社朝日押捻子製作所	サンスター技研株式会社	日鉄鋼板株式会社
株式会社あさひや	サントリーコーポレートビジネス株式会社	日鉄建材株式会社
ALSOK株式会社	サントリービバレッジソリューション株式会社	日本製鉄株式会社
株式会社石川製作所	サン美術印刷株式会社	日本アーツ株式会社
株式会社イシモク・コーポレーション	清水木材株式会社	日本ノボパン工業株式会社
株式会社伊藤園	昇信化成株式会社	ニホンフラッシュ株式会社
伊藤忠テクノソリューションズ株式会社	株式会社伸明	株式会社ノザワ
稲畑産業株式会社	株式会社伸和エージェンシー	富士通株式会社
因幡電機産業株式会社	スターネット株式会社	フルサト工業株式会社
株式会社岩崎貞三商店	セコム株式会社	文化シヤッター株式会社
株式会社インターネットイニシアティブ	株式会社ゼンリン	松本林業株式会社
SMB建材株式会社	損害保険ジャパン株式会社	株式会社丸加商店
SCSK株式会社	ダイキン工業株式会社	株式会社丸国林業
SCSKサービスウェア株式会社	株式会社大伸社	丸紅木材株式会社
NTTドコモビジネス株式会社	ダイドードリンコ株式会社	株式会社マルホン
エフサステクノロジーズ株式会社	大日鋼業株式会社	株式会社みずほ銀行
応用技術株式会社	大和ハウス工業株式会社	みずほ信託銀行株式会社
大阪ガス株式会社	大和物流株式会社	株式会社三井住友銀行
株式会社大塚商会	大和リース株式会社	株式会社メディアテック
河村電器産業株式会社	タカラスタンダード株式会社	株式会社ユニフロー
株式会社キョーライト	チヨダウーテ株式会社	株式会社LIXIL
クマリフト株式会社	ツカ・カナモノ株式会社	
株式会社構造計画研究所	株式会社デザインアーク	

個人会員

50音順敬称略（2026年3月31日現在）

東　美紗都	片岡　美和	寺岡　ムツ子	古川　一郎
安達　和彦	加藤　拓	東郷　久野	古川　岩夫
阿部　文彦	木下　武幸	轟木　裕子	古田　晴彦
荒木　美眞	木村　宗光	中井　敦予	古海　賢二
アリナ・アシェチェプコワ	小巖　仰	中川　雅貴	堀田　健二
池田　政雄	権藤　眞禎	中島　文子	堀内　知子
池田　裕子	阪上　義昭	長塚　徹	間﨑　泰光
石原　美生子	正司　泰一郎	永見　義広	松田　咲希
伊藤　茂男	鈴木　亜衣	夏目　剛	丸山　竜誠
伊藤　正男	鈴木　広隆	西﨑　明美	三木　保人
今西　貴夫	竹内　大樹	西田　隆司	水谷　隆之
岩井　香代子	竹村　肇	西野　勝弘	溝口　明子
岩井　二郎	立岡　弘	野坂　知恵子	宮本　航平
植田　多江子	田中　伸一	橋田　亨	宮本　菜穂
上野　慶三	田中　悠樹	橋本　大樹	物部　健依
上野　龍平	谷本　瑞絵	濱田　賢時	桃井　猛
宇陀　性現	辻　幸二	早川　明弘	森本　健太郎
上原　和也	津田　恵美	平田　大	安田　敏男
榎本　勤	鶴田　宜江	福井　美佐	安田　勝
太田　敏正	出口　陽子	藤原　和之	山﨑　志野
大橋　正孝	寺岡　志郎	藤原　秀之	山村　有佳里

ラトビアTOPICS

2026年6月ズィルガルヴィス大使ご退任

2022年11月より駐日ラトビア共和国大使に就任されていましたズィグマールス・ズィルガルヴィス大使が、2026年6月をもってご退任されました。

就任当初から様々なイベント等にご参加いただき、文化交流・経済活動そして大阪・関西万博の成功にご尽力いただきました。本当にありがとうございました。

なお、ご後任としてクルムホルツ大使が着任されました。

「リガ」が「リーガ」に

2026年4月1日から公式表記が「リガ」ではなく「リーガ」になりました。

ラトビア政府からの要請を踏まえた変更であり、よりラトビア語に近い発音になりました。

Rīga リーガ

編集後記

2025年は大阪・関西万博が開催されたため、関西にも多くの要人がお越しになられました。そして協会の理事や会員の皆様にもパビリオンの運営やセレモニーへの出席など多大なるご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

溝口様には冒頭の「特集」において、パルトパビリオン・ナショナルデー・パルトの日について執筆いただき、内容からも万博にご尽力いただいていたことがより伝わってまいりました。また上野様にもご自身とラトビアについてご寄稿いただきました。改めて勲章の受章おめでとうございます。

会報誌の制作にご協力いただきましたお二方に深く御礼申し上げます。

（事務局　光山）